都内のホテルのスイートルーム。アールデコの真っ赤なソファに座って、有希はインタビューを受けている。身につけたスーツは、先日イタリア旅行をしたときに買ったプラダのものだ。

「そのサングラス、いいね」

取材者が、てっきりブランド物と勘違いして言う。

「これ? これね、ツアー先で買ったの。よくあるでしょ、回転式の棚にガーッて並べて売ってる千円ぐらいのヤツ。私の持ってるサングラスって、そんなのばっかり」

デビューして３年。JUDY AND MARYは追い風に乗るように大きなバンドに成長していた。

リリースするシングルもアルバムも1作ごとにセールスを伸ばし、ライブの動員もうなぎのぼりで増えた。ついにはミリオンセラーも記録し、ひとつの目標だった武道館のステージも超満員で成功を収めた。

たくさんの人たちに自分の歌を届けられるようになり、大きな部屋に自分の好きなものをなんでも並べられるようになった。函館で思い描いていた生活以上のものが、今、有希の手の中にあった。

「ここまで来ると、達成感があるでしょう」

そう聞かれて、有希は考え込む。

(私の夢を叶えたのだろうか?)

しばらくの後、首を振って答えた。

「もし達成感があったら、バンドは続けてないと思う。それに……不思議なんだよね、もう何年も東京に住んでて生活も変化したのに、私、やっぱり函館っ子純情なの。純情って、自分で言うなよって感じだけど、しょせん田舎者だって思うこといっぱいあるし、相変わらず音楽ファンだし。うまく言えないけど、いろんなことが変わったようで、なんにも変わってないようで……。だから歌っていられるのかなぁなんて、この頃よく思う」

過去と未来がつながる道の真ん中に有希はいる。一枚の扉がそこにはあって、開けたり閉じたりしては、あちらとこちらを行ったり来たり。

忘れてしまいたい記憶も、いくつかある。しかし、忘れてはいけないと思う。昨日は今日のためにあったのだし、今日はきっと、明日のためにあるのだろう。

「テレビ見たぞ。なんだ、あのふくれっつらは——」

と毎日のようにFAXを送ってくる父。

札幌ペニーレーンでのはじめてのライブに、巨大なパンを焼いて楽屋に持ってきた母。

「たまにカラオケで有希の真似するとウケるんだ」

と真剣にJUDY AND MARYの歌練習している看護婦の姉。

司法書士を目指して東京で修業中の弟。

どうしても歌入れがうまくいかずに泣きながら電話をすると、「何弱気なこと言ってんの? あんかが歌えばあんたの歌になるんだから。あんたの歌待ってる人たくさんいるんだから!」

と力を与えてくれたソボ。

武道館のコンサートに来て、ひと言「お疲れ」と言って帰っていった彼。

どんなに飲んでばかなことをやっても、電話をしなくても、いつも有希の都合に合わせてつき合ってくれる仲間たち。

そして、いちばん身近で支えてくれる現在の恋人。

何人もの人たちがいてくれたから、今の有希がいる。

悲しいことも恥ずかしいことも、うれしいこともつらいことも、傷つけたことも裏切られたことも、すべてがあったから、今の有希はある。

記憶はエネルギーに違いなく、歩いていくために、すべてを忘れずにいたいのだ。

窓の外に広がる東京の街を見下ろしながら、有希は大きくひとつ息を吸い込む。